

# 歴史史料の文化財化

——貴族日記の故実書化——

藤 本 孝 一

## 一、はじめに

本稿は「継承される史料—人々の行為とその思想—」の題のもとに、シンポジウムが行われた。その折の報告をもとにした論考である。

シンポジウムは「過去の人々がなぜ史料の記述や装丁を改変し、写本や異本を生み出してきたのか、つまり彼らは何を考え、何を残そうとしてきたのか。」を目的にかかげて、「史料を残す」という行為の基底を明かに」することである。

筆者が与えられた課題は、三項目ある。(1)平安時代以来、貴族たちの日記史料が利用され、それが残されていた過程の検証。(2)貴族たちは個々の家柄に合った有職故実を子孫に伝えるために、装訂そのものも利用しやすいように作り替えてきたという行為について、装訂の作り替えといった日記を利用する、遺すといったその過程や作業などを具体的な検証。(3)上記の、日記を中心とした史料そのものに対する行為を史料そのものから分析すること、どのようなことが考えられるのか、もしくは分かるのかの検証である。

貴族日記自体の変容である。日記が書かれ、利用され、遺されて現在に伝えられている。何故に遺されていた

かを解き明かしたい。本稿では、文章ではなく、物としての古記録自体を中心とする。

## 二、物について、

人為的なものは、必ず作られた必然性がある。作られた瞬間にその時代の精神のこころを基盤として、材料・技術・社会・風土を内包する三角錐の頂点にある（図1）。用がなくなると捨てられる。遺されたものは、遺される理由がある。伝えられてきた物は、作られた時点から現在までの時代が印刻されている。伝えられてきた物自体から、歴史が読み取れるのである。そのものを端的に表現しているのが文化財として認定される。

文化財とは何なのであろうか。「文化」と「財」とを合わせた文字である。まず、文化とは何かである。「文化」の意味を定義付けたものに、『広辞苑』を引用する。その項目を挙げると、

「ぶん・か【文化】①文徳で民を教化すること。②世の中が開けて生活が便利になること。文明開化。③(culture) 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問。芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展の二ユアンスが強い文明と区別する。

と説明する。①は漢字の意味を示している。②は文明開化と同意義とする。③西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼んでいると云う。③の精神的な生活が、現在の意味に最も近いのではないか。この精神的な生活は、概念的なものであつて、掴み取ることができない。現物として、把握できるのが、「文化」の項目に含まれている「文化財」であ

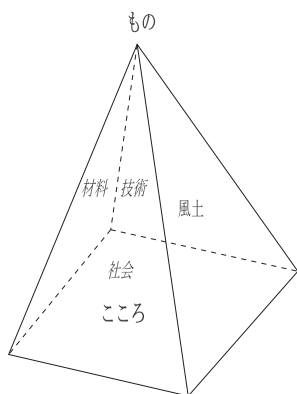


図1 「もの」の構造

る。この項目は、

―ざい【文化財】文化活動の客観的所産としての諸事象または諸事物で価値を有するもの。文化財保護法の対象としては有形文化財・無形文化財・民俗文化財・記念物（埋蔵文化財と史跡名勝天然記念物）・文化的景観・伝統的建造物群の六種がある。

と説明する。この項目は、文化財保護法の条文を要約したものである。次にその全文を掲載する。

#### 【文化財保護法】

昭和二十五年五月三十日法律第二百十四号。最終改正…平成二十三年五月二日法律第三七号

#### 第一章 総則

##### （この法律の目的）

第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。

##### （文化財の定義）

第二条 この法律で「文化財」とは、次に掲げるものをいう。

一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産で我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの（これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む。）並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料（以下「有形文化財」という。）

二 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの（以下「無形文化財」という。）

三 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、

器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの（以下「民俗文化財」という。）

四 貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとつて歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとつて芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で我が国にとつて学術上価値の高いもの（以下「記念物」という。）

五 地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（以下「文化的景観」という。）

六 周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの（以下「伝統的建造物群」という。）

2 この法律の規定（第二十七条から第二十九条まで、第三十七条、第五十五条第一項第四号、第五百三十三条第一項第一号、第百六十五条、第百七十一条及び附則第三条の規定を除く。）中「重要文化財」には、国宝を含むものとする。

（以下略）

とある。（文化財の定義）としているが、全項目を検討すると、文章の意味としての定義ではなく、物の種類だけを「第二条」で挙げているのみである。

古記録に関係するのは、第一項である。有形文化財のうちの「書跡、典籍、古文書」である。組織的に言えば。文化庁文化財部美術学芸課（二〇一八年九月一日、文化財第一課、改称）の管轄で、国民の文化財として毎年、国宝・重要文化財を指定している。しかし、この条文は制度的な物の指定だけで、定義的な意味は表されていない。

そこで、文化財の意味を筆者なりに検討してみる。

「文化」は、精神的なものであつて、文化は捉えどころがない、文化を固定したものが「物」を意味する「財」である。

踊りや演劇の場合、無形なものであるため、指定できないが、無形文化財として演じる人物を認定する。芸術を伝えることは人により伝承されて行く。

人為的に作られた物は、用が無くなると、捨てられていく。この繰り返しにより、段階的に選択されて遺されて行く。古ければ古いほど選択される回数が多くなり、選ばれて行く。それは、年代が経てば経つほど、人が遺す意思が積み上がって行く物である。

また、作られてから現代にいたるまで、遺すための修理が行われ、形態も変わって行く。それを現代から見てものように変わって来たかを見極めることにより、文化財化に認定して行く過程を、歴史的に見る事ができ、それぞれの時代が重層的に反映する。例えば、一枚一枚の古文書を整理して卷子になったり、冊子や手鑑に仕立てられたりして、保存されていく。その過程こそが歴史の具現化された物である。

歴史学は史料の読み説きからはじまる。古記録の日記や古文書に書かれている文字を理解することにより、時代を理解する学問であるが、さらに、伝えられてきた形態の変化からも、歴史を読み解くことができるのである。

また、別な見方からいうと、実用で無くなった史料が伝存している意味は、遺すか捨てるかの選択が常に行われる。利用価値が無くなつても遺されている物は、遺そうとする意思が働いている証である。その意思を探究するのも歴史学である。実用から文化財となる変化でもある。

### 三、平安貴族日の文化財化

文化財として遺そうとする意識が何時頃から生まれたのであろうか。その答は、一点一点遺された理由があり、一点の物から歴史を読み取れる。

文化財として認定される基準は、記録史料・美術品的価値を合わせ持った物である。その例に、Ⅰ藤原定家（一六二～一二四一）の日記『明月記』（冷泉家時雨亭文庫蔵）五十二巻、Ⅱ藤原定家故実書『大原野行幸次第』一卷（個人蔵）、Ⅲ藤原行成（九七二～一〇二七）筆『陣定文案』一卷（個人蔵）を挙げて検討する。

#### Ⅰ 国宝『明月記』

『明月記』は、紙背に定家宛の書状等の裏に書いているため、定家が毎日書いていた日記の原本と言われてきた。しかし、天地に引かれた横の罫線が紙継目を渡っている所から、一巻全体の紙を継いでから書いたことになり、晩年出家後の清書の証拠となる。

長年書状等を保存していた文書を、清書する年齢に合わせて貼り継いで一巻とし、その卷子に毎日書いた日記原本から家司等に清書させたのが現在の『明月記』である。

清書後に切継などして故実書として編纂した。さらに、卷子を約二〇センチ幅に折って折本装にし、包表紙を付けた。折本が開けやすいように、折側二か所に硯箱に収納する千枚通しや刀子（穴が縦長の形になっている）で穴を開けてバインダーのように青い紐で輪っかを通した。表紙の幾つかには、主だった

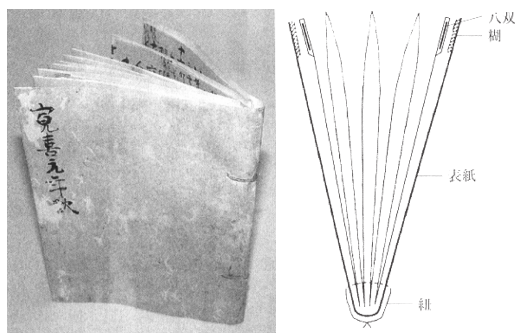


図2 『明月記』折本の復元

内容の目録を書き付けて、儀式の先例が引きやすい形に改装している（図2）。国宝全五十二巻の内、折本になっていたのは、第二十九巻の『建暦二年（一二二二）四月記』の一卷を除いた、第二十八巻『建暦元年（一二二一）十一月十二月記』から第五十巻『寛喜三年（一二三一）秋記』までの卷子である。第五十一巻『貞永二年（一二三三）春記』と第五十二巻『天福元年九月十月十一月記』は天福に改元した一年分で、この年十月に定家は出家した。第二十八巻の建暦元年は、定家が九月八日に従三位に昇り、翌年二月十一日に参議に補任された。貴族の中枢として実務にあたった時期の日記である。それは、為家が嘉禄二年（一二二六）に参議となり、嘉禎二年（一二三六）に、定家と同じ権中納言となったことにより、為家が公事に用いるように定家が子息のために折本にした。さらに家の故実書として子孫らが公事に利用するためである。

折本のままに伝えられてきたが、政治体制も変わった江戸時代になり、装訂し直されて、もとの卷子本に戻され、冷泉家の家祖と歌仙の崇敬により、大切に伝えられている。

## II 『大原野行幸次第』一卷<sup>③</sup>

定家が建保三年（一二一五）に大原野神社行幸の折に用いた故実書である。縦一五・一センチ全長七二・一センチ（墨附一四紙、白紙一紙、計一五紙）である。翻刻伝来等については、拙著『定家本源氏物語行幸・早蕨』の【参考史料】として収録した。

本巻の制作過程は、八紙の紙を半分に切って一六紙を作り、糊附して巻物にした。巻物を二六折に折って折本を作り、行幸記事を編集した下書きの親本をもとに、折本に清書した。さらに『明月記』と同じように刀子で穴を開けて青い紐（紐の擦れ



図3 綴穴（縦開きの対象箇所）

により繊維が残っている）で輪っかにして閉じた（図3、対称の丸い穴は虫損）。江戸時代初期ごろに、折本状であった物を、現在の卷子に仕立て直した。この変化は、中世から近世の移行に伴い実用性が失われ、当時の古筆鑑賞の流行とともに、定家の書跡として尊重された現象である。

この二つの定家古記録の変化を概観すると、次のようになろう。摂関政治以降の家柄の確立は、朝廷に出仕して政治を行うにあたり、律令法的な法令は確立していなかった。そのために、律令法に基づきながら、各人による先

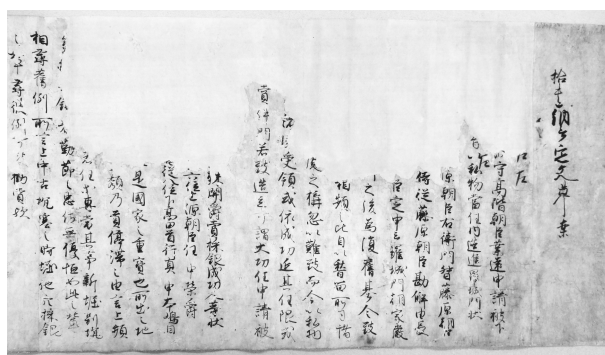


図4 1紙目破損

例が重んじられ、その行動は規範として、各家の先例になり、有職故実として固定化された。朝廷の儀式（朝儀）に臨むために、先例を参考にしながら、行事が進行して行く。それ故に、実務官僚の中級貴族の日記自体、故実書であった。定家も『長秋記』や『中右記』を書写して、朝儀の参考になっている。室町時代は、貴族の衰退とともに有職故実書化は少なくなり、江戸時代になると家の日記はなくなり、一般的な個人の日記となった。

### III 『陣定文案』 一卷<sup>④</sup>

日記『権記』の記主で三蹟の一人である藤原行成の筆になる故実書である。恵美千鶴子氏が全文紹介と考察をしている。それを参考にして法量形態を述べる。

法量は、縦約三二センチ、全長三七九・〇センチで六紙が継いでいる。さらに、巻頭に縦三二・四センチ横一五・一センチの旧表紙が付いている。

一・二紙目は天の部分は半分ほど欠損している（図4）。しかし、三・六紙目は破損がない。特に注目すべきは、紙継目に花押が書かれている（図5）。



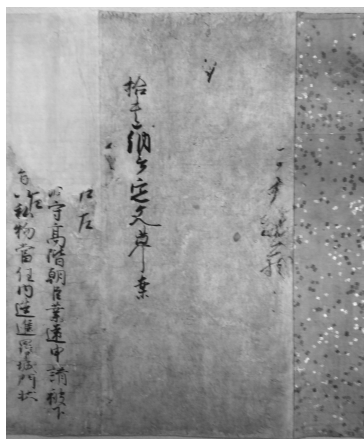


図6 旧表紙汚れ



図5 旧表紙裏花押

しかし、旧表紙と一紙目の上部破損の継目花押も書かれているが、破損の箇所には新しい補修紙のために半分しか残されていない。撰関藤原忠通（一〇九七～一一六四）の花押と恵美氏が指摘する。そうなると、忠通が入手した時には、すでに破損していた。

以上のことから想定されるのが、次のような過程となる。

1、行成は、宮仕えのために陣定の故実書を二巻作成した。  
2、卷子では不便なので、折本二帖にした。実用故実書として、行成の子息も用いた。

3、行成が亡くなった後、いつごろか不明であるが、藤原忠通はこの二帖を入手した。

4、忠通は、撰関であるため、実務官僚の故実書は利用する事がなかった。入手した目的は、名筆家行成の書道の美術品としての評価によるものであった。また、二帖とも同様な内容により、一卷に装訂し直した。

#### 〔折返表紙〕

忠通が一卷とした卷子の復元をする。現在は江戸時代の新補包紙が付けられているが、旧表紙が一紙目に付けられている。卷子本の場合、外題は外側に書くのが一般的であるが、本巻の外題は「拾遺言定文草案」と内側に書かれている。また、継目花押があり、

図 『明月記』  
折返表紙 1  
折返表紙を復元したものである。

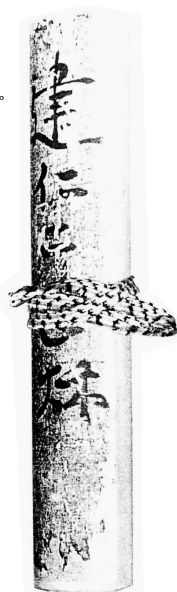


図 『明月記』折返表紙 2  
折返表紙を復元したものである。



図 7

巻紐の跡が認められる。さらに、旧表紙が汚れているのは、外側になっていた証拠である(図6)。

以上の状況から想定されるのは、折返表紙であった。折返表紙は拙著『古写本の姿』<sup>⑤</sup>に『明月記』から復元した(図7)。この場合、軸は附けない。江戸時代に軸を附けて現在の表紙を附ける時に、破損箇所を修理する際に原表紙の上にあった忠通花押が新しい紙に替えられたために欠損した。

恵美氏も「二、伝来と、藤原行成の書の尊重について」の一章を設けている。忠通の時代、平安時代後期には、既に美術品として鑑賞されていた。文化財として認定されて遺されていく、早い例であろう。

#### IV 古筆切

内容よりも美術品として認識されて遺されていく例に古筆切がある。

個人の追慕と尊敬、さらに芸術性により、個人の筆跡を掛幅や手鑑として鑑賞するために、古人の筆跡の色紙や短冊、経巻・典籍の一部を切り取ったものである。

最初は鎌倉時代ごろから始まるといわれ、空海筆とされる滋賀県竹生島の宝厳院蔵の経巻の一部を切り取った事例が最も早い例である。さらに、天文二十四年(一五五五)十月に茶人武野紹鷗(二五〇二〜一五五五)が藤原定家の染筆『小倉色紙』の色紙を茶会の床飾りに用いたところから、茶会に用いる第一の古筆切となった。定家の書が美術品として文化財となつて遺された契機でもある。

安土桃山時代に大流行となる古筆切鑑賞は、代表的な収集家に豊臣秀次(一五六八〜一五九五)がいる。秀次は教王護国寺(東寺)に所蔵する弘法大師空海筆『風信帖』(国宝)の一通を献上させた。また、空海筆『狸毛筆奉献表』(国宝、醍醐寺蔵)からも数行を切り取らせている。冷泉家からも藤原定家筆『公忠朝臣集』一帖を献上させている。この後、この家集は、徳川家康の所有になり、現在は五島美術館に所蔵されている。また平安時代の『花山僧正集』が宇喜多秀家(一五七三〜一六五五)の所望により、後ろ二丁を切り取って譲渡としている。

切断された断片である古筆切は、美術鑑賞として遺された象徴である。特に『大手鑑』（陽明文庫藏）・『藻塩草』（京都国立博物館藏）・『手鑑「見ぬ世の友」』（出光美術館藏）・『手鑑「翰墨城」』（世界救世教藏）の四件が国宝に指定されている。国による文化財としての認定である。

#### 四、おわりに

日記は卷子本や冊子本の紙に書いた物である。一枚からなる古文書と相違する日記等の冊子本は「装訂された記録装置」と規定している。そこから見えてくる貴族日記は、形を変えて伝えられた。

貴族日記は、律令制度が崩壊する過程で、官司請負制度が成立する。この制度は、家柄の成立とともに、家柄にあった日記が書かれた。藤原師輔（九〇八〜九六〇）は宮廷の公事を日記に書き留めることや実行すべき公事をまとめて『九条殿御遺誠』に書き残している。

個人日記が一種の公的日記となる。先例が書かれている日記は、晩年に編纂され、公事別に編集されて故実書にまとめられ、家柄の法律になった。先例が一種の法令として、律令法の代わりに、官司請負制の法令となった。そのために、他の貴族日記も参考になり、実務官僚である源師時（一〇七七〜一一三六）の日記『長秋記』や藤原宗忠（一〇六二〜一一四一）の日記『中右記』等は定家をはじめとした貴族たちが購入したり、書写したりしている。

卷子本に書写されるが、利用には不便なため、折本にして使われた。後世になり、官司請負制度が衰退すると、捨てられてしまうが、家柄の象徴や記主の筆跡尊重などの理由により、遺されて、活用の折本から保存用の卷子本に戻される。さらに、定家などの筆跡（美術品）の尊重により、切られて古筆切になり、美術品として掛幅にして床の間に飾られる。

文化財として認定するのは、「物」を遺そうとする人の意志であり、残そうと思った時から「文化財」となり、時代が立つとともに「文化財」としての価値が重ねられていき、「文化財」となつて遺されていく。

註

- (1) 『広辞苑』(第七版、岩波書店、二〇一八年一月刊)
- (2) 拙著『国宝『明月記』と藤原定家の世界』臨川書店、二〇一六年七月刊。
- (3) 拙著『定家本源氏物語行幸・早蕨』(影印本)解説。八木書店、平成三〇年二月刊。
- (4) 惠美千鶴子「藤原行成筆「陣定定文案」の書誌・伝来」(『禁裏・公家文庫研究』第五輯、思文閣出版、平成二七年三月刊)。
- (5) 拙著『『明月記』古写本の姿』四一頁(『日本の美術』四三六号、至文堂平成十六年三月刊)。